

【小論文】

別紙は、ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」のうち、「大審問官伝説」と呼ばれる有名な箇所抜粋である(ただし、一部を省略している)。大審問官伝説とは、カラマーゾフの兄弟の次男イワンが、三男アリョーシャに語って聞かせた創作の戯曲である(ただし、原文には改行はないが、わかりやすさのため、何か所か改行を入れている)。

その戯曲は、イエス・キリストが布教活動に入る前に40日間、荒野で断食の修行をしたとき悪魔が3つの試みでキリストを誘惑した「悪魔の誘惑」と呼ばれる聖書の断章を題材としており、その聖書の箇所は、大審問官が「3つの問い」に言及した部分に「出題者注」として引用している。

【出題趣旨】

大審問官伝説が予言的メッセージを有することの意義を社会的見地から解答を求める。同伝説は、自由の哲学的意義づけを明らかにしたものであるが、それは社会的見地からも重要であり、自由の意義と自由よりもパンを求める社会に向かうことの問題を今日のウクライナ戦争との関係で考察させることを出題趣旨としている。

問題1 大審問官は、聖書の「悪魔の誘惑」の3つの問とそれに対するキリストの答が何を象徴するものとして理解したのか。

【解答例】

3つの問いは、奇跡と神秘と権威(パンと神秘と権威も可)を象徴し、それらによって社会をすることを望んだが、キリストは、それらを否定し、「自由」(または自由意思の尊重)によって社会が規律されるべきであると答えた。

(地上の力を「奇跡と神秘と権威」とするところがあるが、実際に地上の権威は、奇跡を行うことはできないし、また、実際に奇跡の力ではなく、「パン」を与える力によって統治するといっているため、「パンと神秘と権威」も正解とする。

問題2 (戯曲によれば)大審問官によると教会がキリストの死後、1500年間で、行ってきたのはどのような仕事か。

【解答例】

自由意思に基づく社会の規律を否定し、奇跡と神秘と権威に基づいて社会を規律している（自由意思に基づく信仰を否定し、奇跡と神秘と権威に基づいてキリストの教えを説いている）。

問題3 なぜ大審問官は問題2のような仕事を行ったのか。

【解答例】

人間は、キリストが考えたような崇高なものではなく、もっと卑しいものであり、キリストの教えでは、救われるものがごく少数に限られる。多くの者にとっては、パンなしに生きてゆけず、自由は、どうしてよいかわからず、苦痛をもたらすに過ぎないものだから。

問題4 ドストエフスキーの文学、ことにカラマーゾフの兄弟の大審問官伝説は、予言の書とも評価されてきたが、ウクライナ戦争についてロシア正教会総主教が侵攻を支持していることから、予言の書としての大審問官伝説が改めて注目されている。大審問官伝説に照らせば、ウクライナ戦争は、どのような戦いとして意義を持つといえるのか。

【解答例】

大審問官の論理では、ウクライナの自由を求める反逆者は、多数の人間を幸せにするものではなく、独裁によるロシアの統治は、「奇跡・神秘・権威という大衆の欲求に基づく統治」（パンと権威という大衆の欲求に基づく統治も可）であり、多数の幸せのためには、自由を求める少数の反逆者を罰するための侵攻は正当化される。総主教が侵攻を支持しているのは、大審問官の以上の論理を採用しているといえる。

問題5 大審問官伝説は、19世紀に突如、開花したロシア文学が、西洋文学よりも深く「自由」の哲学的意義を問うたものと評価されることがある。あなたは、この伝説の現代的意義についてどのように考えるか、その理由とともに述べよ。

【解答例1】

自由は、ギリシャ・ローマの社会システムの根幹思想であり、原始キリスト教は、その社会システムを神の権威によって打ち破ったものなので、自由が、聖書の悪魔の誘惑の断章に依拠して語られるのは違和感がある。しかし、その結果、神の権威によって権威主義が強化され続けると勝手に権威者による解釈が絶対化され、教祖までも処刑する事態に至ることは示唆的である。自由という価値観が、パンと権威（跪拝の統一性）を求める大衆によって覆されやすいことが示唆されている。ソ連の崩壊により、自由が勝利したかに見えたが、ウクライナ戦争は、改めて自由よりパンと権威への欲求が強いこと、自由の価値、自由を尊重しない社会の持つ危険性を明らかにして

いるように思われる。

【解答例 2】

異端審問が教祖の教え自体を否定し、処刑未遂にまでおよぶという卓越した挿話を通じ、権威主義・パンに傾倒した社会システムが、教祖の教え、キリスト教の教義の根幹(六法全書)ともいうべき聖書の解釈を根本的に変更する事態がありうることについての警鐘を示しており、それは、普遍的な警鐘である。ウクライナ戦争はその問題を改めて現代人の眼前に突き付けたといえる。

【解答例 3】

大審問官伝説の議論は、欧州よりも非欧州特にアジアでは共感を呼びやすいことがウクライナ戦争で示されたように思われる。大審問官は、自由は、反逆と無秩序をもたらすだけであり、多くの人にとっては、使いこなせない道具である。多くの人にとって重要なのは、パンであり、権威に基づく平和な(秩序ある)社会であるといっているように思う。そのような議論への共感は、グローバルサウス・新興国では強く、それが社会主義を生み出す原動力となった。しかし、ウクライナ戦争は、そうした欲求の強さを再認識させると同時に、改めて自由の価値、自由を尊重しない社会の持つ危険性を明らかにしているように見える。

以 上